



「わが村は美しくー北海道」運動 第7回コンクール大賞表彰式・交流会 参加しよう・広げよう・いいもの伝えよう

国土交通省北海道開発局農業水産部農業振興課

北海道開発局では、道内各地で取り組まれている地域の魅力と活力を高めようとする住民主体の活動を見出し、これを広く発信し波及させていくことによって、農山漁村のさらなる発展に寄与することを目的に、「わが村は美しくー北海道」運動を推進しており、その一環として、平成14年からこれまで2年に一度コンクールを開催しています。

第7回コンクール 大賞及び審査委員特別賞

第7回となる今回のコンクールは、平成26年3月に募集を開始し、99団体の応募がありました。コンクール1年目の平成26年度は、全道10のブロック毎に応募団体の現地調査を行い、審査選考の結果、地域の活性化や個性的で魅力ある地域づくりにおいて優れた活動として、優秀賞14団体と奨励賞30団体を選考し表彰しました。

2年目の平成27年度には、優秀賞14団体の中から、特に先導性・モデル性の高い活動を行う3団体を大賞として選考するとともに、今回は特別に審査委員特別賞が2団体に贈られることとなり、11月30日に、札幌市で表彰式と交流会を開催しました。

今回の「大賞」は、(1)農村地域へ観光客を呼び込む窓口「畑の案内所」を作り、農産物の収穫体験等を通じて村ぐるみで都市と農村の交流を図っている「新篠津村・農業観光生産者協議会（新篠津村）」、(2)軽トラックによる機動的な対面販売に、デザイン性を備えた新しい農業スタイルで地域づくりに取り組んでいる「絵本の里けんぶち VIVAマルシェ（剣淵町）」、(3)「景観」「地域特産物」「人の交流」の3つの要素をバランス良く総合的に展開し、地域が一体となって活動している「落石地区マリビジョン協議会（根室市）」の3団体が選ばれました。



本田北海道開発局長から大賞表彰状が授与されました

さらに今回は特別に、過疎化、少子高齢化が進行する農山漁村における地域活動の継続が危惧される中、地域で活動する「人」という観点に着目して、今後とも活動の継続を期待する次の団体に大賞審査委員特別賞を授与しました。

(1)高校生のフレッシュな発想力で関係機関と協力して地域の循環型農業を実践している「北海道倶知安農業高等学校（倶知安町）」、(2)長年に渡り高齢者の役割向上と地域活性化を果たし、農山漁村における高齢者社会の手本となる取組を進めている「農村生活文化伝承活動をすすめる会（豊富町）」の2団体です。

大賞審査委員長の黒河功氏からの講評では、大賞候補となった14団体の活動が、何れも地域が主体となったたいへん魅力ある内容のものばかりであったこと、そして、大賞を審査・選考する視点として、(1)活動の具体的な成果、効果が顕著であること、(2)活動の内容に「先進性」「継続性」「広がり」などの特性を持っていること、(3)「村づくり」という活動の中で「景観」「地域特産物」「人の交流」の要素がバランスよく機能していることについて、共通認識を図り選考を進めたことなどが説明されました。

大賞受賞3団体の代表からは、活動報告があり、それぞれパワーポイントやビデオメッセージ等を使用して取組の経緯や創意工夫した点などが紹介されました。

魅力ある活動に満ちた北海道を未来へ

表彰式終了後、NPO法人わが村は美しくー北海道ネットワーク主催による「交流会」が開催されました。

交流会第1部では、当運動にゆかりの深いお二人による特別講演が開催されました。

平成18年度の掲載開始以来、JR北海道車内誌の「わが村は美しく」のコーナーを担当しているクリエイティブ・ワークスの船本弘美氏から「取材から見てきた農山漁村地域の活性化」と題して、これまでのコンクール受賞団体の活動を取材されたエピソードを交え、「人」や「もの」でつながり地域活動を継続することの重要性について説明をいただきました。



船本 弘美氏
クリエイティブ・ワークス

また、当運動の開始から長きにわたり北海道田園委員会のメンバーとして指導いただいている東京農工大学名誉教授の千賀裕太郎氏からは「わが村は美しくー北海道」運動から見た景観」と題して当運動のモデルとなったドイツの「わが村は美しく」コンクールの事例が紹介され、当運動が目指す「景観」について、お話がありました。



千賀 裕太郎氏
東京農工大学名誉教授

「わが村は美しくー北海道」運動は、「景観」「地域特産物」「人の交流」を3つの大きな柱として展開しています。この運動を通じ、北海道のたくさんの「いいもの」をできるだけ多くの人に伝え、世界に誇ることのできる、私たちの豊かな北海道を未来へと受け継いでいくことをめざしています。



表彰式に出席の大賞、審査委員特別賞受賞者の皆さん